

## 実験動物研究の道程

会長 猪 貴 義

「動物の個体差は制御することのできない宿命である」と多くの研究者が考えていた時代に、「動物の個体差をそのまま放置しては、再現性のある、科学的批判にたえる data を集積することはできない」と判断して、1951年に、医学・薬学・獣医学・畜産学・理学などを含む10数人の有志によって実験動物研究会を組織し、活動を開始したのが、わが国の実験動物近代化運動の始まりである。筆者は、1951年に、大学の農学部を卒業したが、当時の思師である西田周作教授より、実験動物研究は将来重要な意義をもって来るので、十分に関心をもってのように指示され、誕生間もない「実験動物研究会」に参加するようになったのも不思議な縁である。

1950年代初期に始まったわが国の実験動物近代化運動は、最初に、近交系マウスの作出、維持といった実験動物の遺伝的コントロール (genetic control)、次いで、実験動物が保有する病原微生物のコントロール (microbiological control, disease control)、さらに飼育環境のコントロール (environmental control) の課題がとりあげられた。そして、これらの諸問題を次々に解決することによって、わが国の動物実験の精度は飛躍的に向上するに至った。

わが国において、実験動物近代化運動が開始されて、既に40年の歳月が経過しようとしているが、最近、つくづく感ずることは、多くの研究者が依然として動物実験に使用される動物自身の重要性に気がついていないのではないかとといった憂慮である。そして、その原因の一つとして、研究方法論 (methodology) をめぐる認識の低さにあるのではないかと考えている。研究を進めるにあたっての第1段階は、研究上重要とみられる問題に気づき、これをとり上げることである。第2段階は、研究上提起された問題を解決するのに役立つ、あ

るいは、その問題の解決を可能とする仮説をつくることである。第3段階は、作業仮説を検証するための材料と方法 (materials and methods) を含む実験計画を立てることである。第4段階は、実験実施、第5段階は実験結果の集計・分析・まとめと進んでゆく。研究を進めるに当たって、材料と方法は、作業仮説を検証するための重要な部分であり、科学的真理が生み出される基盤である。従って、不適当な研究材料と方法の採用、不完全な実験操作は、研究を誤った結論に導き、研究の進歩を著しく阻害する結果につながる。このことに研究者は気付くべきである。

諸外国、わが国における実験動物研究の成果は、各種実験動物について多くの近交系、ミュータント系、クローズドコロニーの作出に成功し、癌、高血圧、脳卒中、循環器病、糖尿病、各種難病等を含む特定研究目的に適した各種動物が開発されてきている。そして、各種実験動物の遺伝的背景 (genetic background) も次第に明らかにされてきている。無菌動物、ノトバイオートの開発は、長年月にわたり、その排除が困難とみられた不顕性感染症の防圧に成功し、特定病原菌不在とする SPF 動物開発への道を開いた。さらに、実験動物についての環境生理学の研究は、動物の生理的恒常性が維持できる飼育室の環境調節目標値の範囲を決定し、国内外ともに、ほぼ一定の環境条件での動物実験の実施を可能にし、国際間における data の相互比較を容易にした。

1982年に、岡山実験動物研究会が発足した。

この研究会は、大学や学部、研究機関のわくを越えて、実験動物の側にある研究者及び生産者と、動物実験の側にある研究者とが集まり、自由の雰囲気のもとで、相互の知識と情報の交流をはかることを目的として発足したものであるが、今後とも実験動物と動物実験との関係を重視し、会の一

層の発展をはかっていってほしいと願っている。

現在、会員数は約120名であり、有志26名で会を発足した当時を考えると感慨無量のものがある。会員は岡山在住関係者だけでなく、中・四国地域、その他の地域にも広がりをもっている。県外会員は研究会行事に参加する機会が少なく、研究会報を通じての交流となっているので、今後とも会報の充実をはかってゆくことが大切であろう。会報の編集方針としては、主として実験動物、動物実験に関する総説、主張、提言、紹介（実験動物、動物実験法、実験手技、施設、集会、新刊図書など）を取扱い、当然のことながら、学会誌に投稿

するような original report は掲載しないことを申し合せてきた。遠隔地の会員の方々には、発言の場として、本研究会報を有効に活用されることを願っている。

本研究会は発足して既に8年の歳月が経過したが、新しい時代には新しい対応が必要である。次代を荷う若い研究者達の参加によって、会に新風を吹き込み、本研究会がわが国における特色のある研究会として成長し、着実に発展することを祈念いたします。関係各位には、引続き、本会発展のために、ご鞭撻とお力添えをたまわりますようお願いする次第です。